

船舶事故調査報告書

平成25年3月14日
 運輸安全委員会（海事専門部会）議決
 委員 横山 鐵 男（部会長）
 委員 庄 司 邦 昭
 委員 根 本 美 奈

事故種類	火災
発生日時	平成24年7月28日 16時00分ごろ
発生場所	山口県萩市見島北東方沖 見島北灯台から真方位043° 25.0海里（M）付近 （概位 北緯35° 06.2′ 東経131° 28.3′）
事故調査の経過	平成24年9月24日、本事故の調査を担当する主管調査官（門司事務所）ほか1人の地方事故調査官を指名した。 原因関係者から意見聴取を行った。
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等 L×B×D、船質 機関、出力、進水等	漁船 ^{えいこう} 栄光丸、14トン FK2-2027（漁船登録番号）、個人所有 16.33m（Lr）×4.32m×1.93m、FRP ディーゼル機関、478kW、昭和54年9月2日
乗組員等に関する情報	船長 男性 36歳 一級小型船舶操縦士・特殊小型船舶操縦士・特定 免許登録日 平成6年3月23日 免許証交付日 平成20年3月24日 （平成26年3月22日まで有効）
死傷者等	なし
損傷	全損（全焼）
事故の経過	本船は、船長及び甲板員Aほか甲板員1人が乗り組み、平成24年7月28日13時00分ごろ、いか釣り漁のため、島根県浜田市浜田港を同港北西方沖の漁場に向けて出港した。 船長は、見島北東方沖を約10ノットの速力で航行中、16時00分ごろ、焦げた臭いとともに、機関出力の低下を認め、機関室内を点検しようとして操舵室を出たところ、機関室後方の船員室で休息中の甲板員Aも船員室内に漏れてきた煙に気付いて室外に出てきた。 船長は、甲板員Aが機関室右舷側の出入口引戸を開けたところ、機関室内全体に煙と炎が見えたので操舵室に戻り、同じ漁場に向かっていた僚船に無線機を使用して救助を求めた。 本船は、甲板員Aが消火器1本を使用して初期消火を試みたが、火の勢いが強いので消火活動を断念し、間もなく、機関室上方の操舵室から火の手が上がった。

	<p>船長及び甲板員2人は、船尾甲板に退避して救命胴衣を着用し、16時05分ごろ海に飛び込み、16時20分ごろ来援した僚船に救助された。</p> <p>本船は、その後、同じ漁場に向かっていた僚船3隻が来援したものの、火の勢いが強いために近づくことができず、僚船から通報を受けた海上保安庁の巡視船1隻及び巡視艇1隻が18時00分ごろ現場に到着して放水による消火活動を行ったものの、全焼し、29日08時40分ごろ火災発生場所から北東方約20M付近で沈没した。</p>
気象・海象	<p>気象：天気 晴れ、風向 北西、風力 2、視界 良好</p> <p>海象：海上 平穏</p>
その他の事項	<p>主機は、7月から始まる山陰沖での操業前、6月初旬において、主機のピストン抜き整備のほか、燃料噴射弁、吸排気弁等の整備が地元の機関整備業者によって行われ、燃料噴射ポンプは専門業者によって整備が行われた。</p> <p>本船は、浜田港出港時、機関室両舷に設けられた容量が約3klの燃料タンクをそれぞれ満タンとして出港した。</p> <p>機関室ファンは、2台設置されていたが、本事故当時、2台とも排気ファンとして運転されていた。</p> <p>機関室には、火災警報装置はなく、自動消火器が機関室の前壁、天井及び後壁に設置され、火災発生当時、甲板員Aは、機関室内から破裂音がしたので、自動消火器が作動したと思った。</p> <p>本船は、約3年前に集魚灯用電気配線が短絡して小規模の火災が発生したことがあった。</p> <p>本船は、平均すれば5年に一度、電気配線の絶縁抵抗測定を行っていた。</p>
分析 乗組員等の関与 船体・機関等の関与 気象・海象の関与 判明した事項の解析	<p>不明</p> <p>あり</p> <p>なし</p> <p>本船は、見島北東方沖を漁場に向けて航行中、機関室から出火したものと考えられる。</p> <p>本船は、建造後30年以上経過していることから、機関室内の電気配線等が絶縁低下して短絡し、発火して延焼した可能性があると考えられるが、沈没していることから出火状況を明らかにすることはできなかった。</p>
原因	<p>本事故は、本船が、見島北東方沖を漁場に向けて航行中、機関室から出火したことにより発生したものと考えられる。</p>
参考	<p>今後の同種事故等の再発防止に役立つ事項として、次のことが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機関室には、火災警報装置の設置が望まれる。

- | | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none">・ 建造後長い年数の経過した船の電気配線等は、絶縁抵抗測定周期を短縮するなどして点検を十分に行うこと。 |
|--|---|